

2022 年度 国際学科

小 論 文

〔自己推薦 A O (A)〕 14-02

注 意

1. 監督者の合図があるまで問題冊子は開かないでください。
2. 解答はすべて解答用紙のきめられた箇所に記入してください。

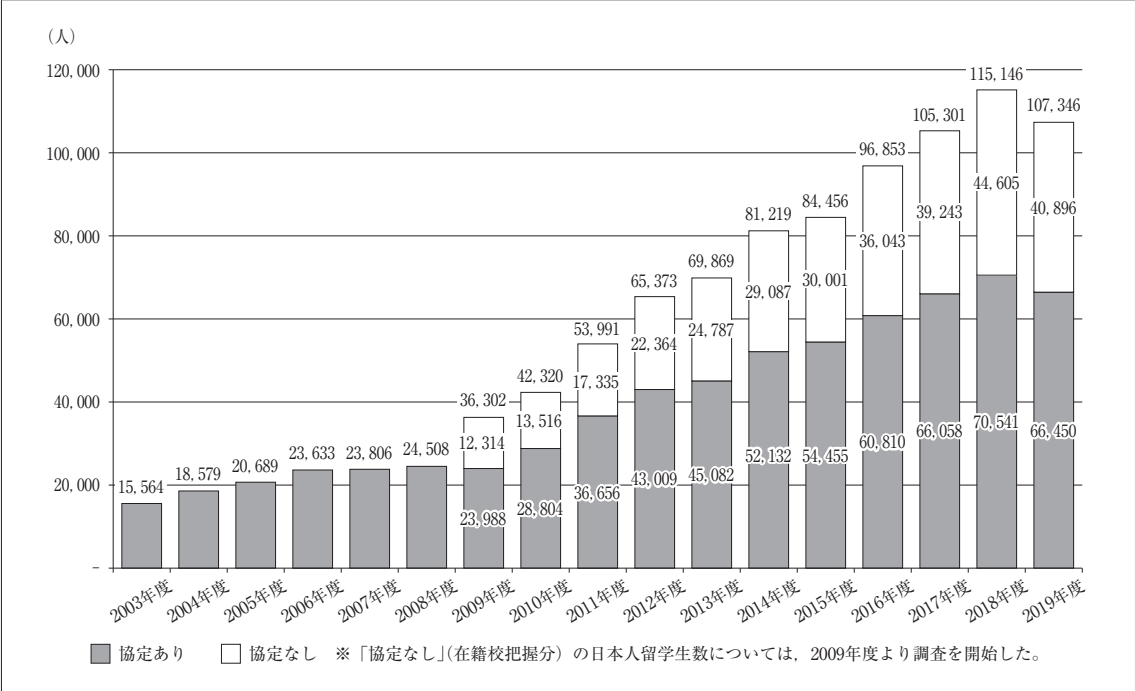
問題

日本の若者が国内志向を強めて「内向き」になっているという声も聞く。だが昨今、コロナ禍の影響を受けるまで、海外留学生数は増加傾向にあった。

資料1①②は、日本の大学に在籍する学生の海外留学に関するデータに基づく。これらをもとに、海外留学生数の増加傾向の特徴について論じなさい。

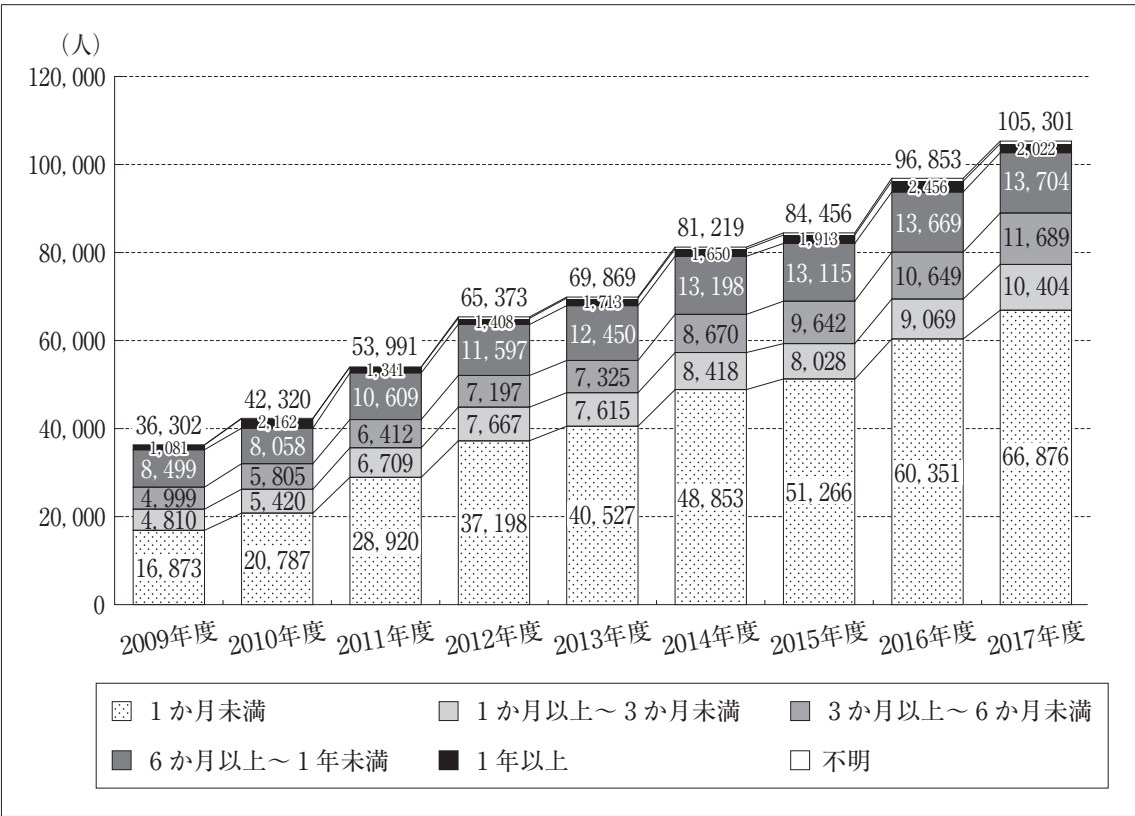
他方、アメリカの大学に学部から正規入学することを選ぶ者の増加も、注目されるようになった。資料2は、東京大学を辞めてアメリカの大学に入学した3人へのインタビューである。資料1の検討結果をふまえて、この3人の意見に対してあなた自身が賛成か反対かを明確にし、その理由を述べなさい。

資料1① 日本人学生留学生状況の推移



〔出典〕独立行政法人日本学生支援機構「2019（令和元）年度 日本人学生留学状況調査結果」 2021年3月

資料 1 ② 留学期間別留学生数の推移



〔出典〕 文部科学省「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について 2019年1月18日

(https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/__icsFiles/afieldfile/2019/01/18/1412692_1.pdf)

連載初回の今回は、2017年の4～7月まで東大に通い、9月から米国の名門大学に渡った3人の学生に、座談会形式で米国大・東大併願の経緯や、東大での半年間の生活について語ってもらった。

(中略)

西尾 米国大受験を決意したのは高3の8月末でした。高校の二つ上の、ハーバード大学に行った先輩とたまたま話して、全寮制のハーバード大学の寮で友人と夜な夜な語り合う楽しさについての話などにインスパイアされたのがきっかけです。当時は国際関係論をやろうと思っていたので、世界からいろいろな人が集まっている米国の大学っていいな、と感じました。

上田 僕は高2の夏にHLABというサマースクールでリベラルアーツ教育の魅力に触れ、米国の大学に興味を抱きました。それまでは、なんとなく東大を受けようと考えていました。しかし東大だと必ずしも自分の進みたいと思った分野に進学選択で行けるとも限らず、後に興味を抱いた心理学も理系なのか文系なのか曖昧な学問だったので、(文理の区別がなく専攻も入学後に自由に選べる)米国大にチャレンジしてみよう、と思いました。

鞍馬 漠然とは結構前から考えていましたが、強く意識したのは高1冬に高校で開かれたカレッジフェアに参加したときですね。このイベントでは米国や英国、フランスの大学の関係者から話を聞けたのですが、その中でリベラルアーツ教育に引かれました。僕は数学が好きな一方で経済や歴史といった社会科学にも興味があったので、分野融合的な学習ができ、レベルを自由に選択して授業を取ることのできる米国の大学の柔軟な環境は自分に合っていると思いました。

(中略)

——それではここから、東大受験の経緯について伺っていきます。まず皆さんが東大併願を決めた理由をお聞かせください

西尾 東大受験は、米国大受験を許可してもらえるよう親を説得するための条件でしたね。とりあえず東大は行ってくれ、と言われて、「あ、はい」というか。後は、高校を卒業した後、9月に米国大学に入学するまでの4カ月のギャップタームの間も勉

強をしたかったので、そのための環境を確保したいという思いもありました。米国大受験を決めたのが遅く全落ちの可能性もあったため、浪人を避ける意味合いもありましたね。

上田 僕も高3の6月に米国大受験を決意したのですが、その時の親を説得するための条件が「両方受ける」ことでした。高3の8月に留学フェローシップでエッセー執筆の大変さを知り、一旦東大受験をやめようとしたのですが、9月に学校がまた始まると、学校で日本の大学受験向けの勉強をするのも楽しかったですし、成績もそこまで悪くなかったので、受けられるなら受けてみよう、と最終的には東大も受験しました。

鞍馬 2人と似ているのですが、やっぱり親からそういう風に言われていたんですよね。高校の普段の授業が日本の大学の受験を意識していて、周りで東大を受ける人も多かったのですが、併願に尻込みするようなことはありませんでした。もしギャップタームで通うことになったら日本の大学がどういうものかを見ておきたい、という動機もありました。

〔出典〕「【蹴られる東大①】本音で語る、僕らが海外を選んだ理由（上） 海の向こうへの挑戦」東大新聞オンライン 2018年4月1日 (<https://www.todaishimbun.org/kerareru20180401/>)